

平成30年度離島漁業再生支援交付金取組概要

平成31年5月7日

1. 対象漁業集落の概要

都道府県名：沖縄県

市町村名：渡名喜村

島名：渡名喜

協定対象漁業集落名：渡名喜村渡名喜漁業集落

協定参加世帯数：62世帯（64人）

（うち漁業世帯数：62世帯（64人））

2. 協定締結の経緯

本村の海域は、自然な環境を有しており、漁業者にとっての貴重な漁場であり、渡名喜村の漁業者がこれらの海域環境を適切に管理し、これを保全するとともに周辺水域の有効利用を図ってきた。しかし、近年では異常気象による温暖化等により資源も減少傾向にありまた、漁業が基幹産業である渡名喜村においても、漁業者の減少や高齢化が進んでおり、このまま放置すれば一層衰退し、水産業・漁村における多面的機能も失われていく懸念がある。

このため、漁業の基盤となる漁場の保全や利用に関する話し合いを通じて、種苗放流、漁場監視、サメ駆除やオニヒトデ駆除、新規養殖業への着業、高付加価値化、体験漁業の取組、アーサ養殖を継続的に実施する事や、新規養殖業者の確保、定着を図る必要がある事から、その取組の継続を下支えするために離島漁業再生支援交付金にて取組む事とした。

3. 取組の内容

①漁場の生産力の向上に関する取組状況

種苗放流：以前は豊富だったウニだが、近年では地域全体で温暖化の影響や餌となる海藻の減少により資源が低下しているシラヒゲウニの種苗放流を実施して、0個（平成26年度実績）から、5,000個（平成31年度）まで資源の回復、増加を図る事とした。



(別紙2)

漁場監視：渡名喜村設置のパヤオをはじめ、漁業協同組合又は、漁業集落が設置したパヤオ等付近、又は渡名喜島周辺で操業している不審船及び密漁者を発見した場合に写真、船番を控え、関係機関に連絡する。

また、漁場の環境保全として、流木等の漂流物の監視を行う。



その他（サメ駆除）：操業時において、サメによる漁獲物の食害や、漁具への被害が多く発生している状態である為、サメ駆除を実施し、漁獲高の向上及び被害の減少を図る。



その他（オニヒトデ駆除）：渡名喜周辺（リーフ内）において、オニヒトデが発生しており、魚の産卵場でもある珊瑚を食い荒らす事で資源の減少がおきている為、被害の減少を抑える為、オニヒトデを駆除し、珊瑚の復活を図り、産卵場の保全を図る。



(別紙2)

②漁業の再生に関する実践的な取組状況

新規養殖業への着業（シャコ貝）：新規養殖業を着業し、シャコ貝の生産量 0.1t（平成 27 年度）から 0.2t（平成 31 年度）増加させる事を目的とし、共同漁業県内（特区 257 号）の海底にて養殖する、また養殖したシャコ貝に付加価値を付け、販路拡大を行う。



新規養殖業への着業（ヒトエグサ）：冬場、季節風時に漁に出る事が出来なくなる漁家の所得向上を図り、ヒトエグサ養殖を実施することにより漁家の冬場の所得向上を図る。



高付加価値化：セリ値の安い魚を一部買取り、高付加価値化、（燻製・干物等）や、養殖したシャコ貝を加工（塩辛）の商品開発を行い、島内販売や離島フェアなどのイベント等に出店し販路拡大を行う。

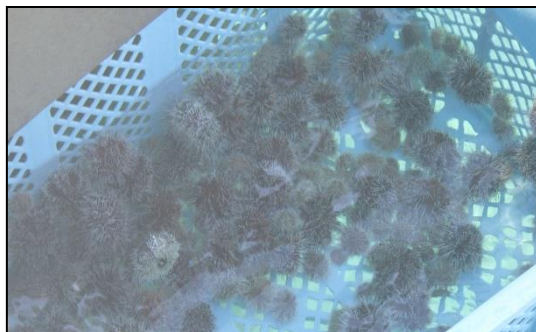


体験漁業への取組：後継者育成の一環として、リーフ内における追い込み漁や、船釣り体験を地元生徒に実施し、漁業の大切さを実感してもらうとともに、体験漁業のノウハウを元に、漁業周御者の増加及び体験漁業の観光商品化を図り、観光漁業の導入を検討する。

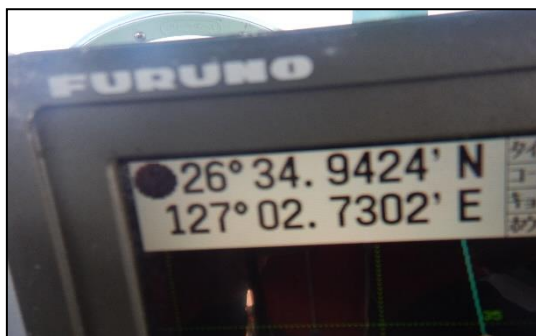
(別紙2)

4. 取組の成果

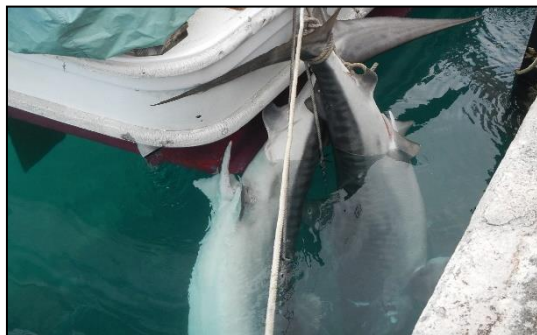
種苗放流：ウニの資源回復を図り、30年度はシラヒゲウニの種苗を2,000個放流した。効果の確認には年月がかかると思われる。また、数匹のウニを港内にある浮棧橋にて試験的に養殖を行っている。



漁場監視：村が設置したパヤオ付近での違法操業の監視や島の周辺海域で違法操業している漁船の監視を実施した結果、継続的な実施もあり、最近では減少している。



その他（サメ駆除）：カツオやマグロ、ハタやマチ類の好漁場でもある渡名喜島の西側海域はで、これまで1本釣りや史縄漁時の被害も減少している。30年度は4回の駆除を行い26匹のサメが駆除された



(別紙2)

オニヒトデ駆除：島周辺海域でオニヒトデが発生し、珊瑚への被害が頻発していた為、毎年継続したことでオニヒトデが減少してきており、30年度は4回の調査で2匹のみの駆除となった。



新規養殖業への着業（シャコ貝）：30年度は1,500匹のヒレナシジャコ稚貝を購入し試験養殖を行った。当初に購入した種苗が成長し、1,500個の収穫が出来た。収穫したシャコ貝で塩辛を作り、となき祭り、離島フェアで販売した。



新規養殖業への着業（ヒトエグサ）：漁業者の冬場の所得向上を図り、30年度は県の指導の下ヒトエグサの試験養殖を試みたが、前年度と同様に成長が思わしくなく、思うような成果が上げられなかった。



(別紙2)

高付加価値化：新規養殖業での着業で収穫したシャコ貝や、セリ値の安く、出荷の厳しい雑魚等を地元漁業者から安価で買取り、水産加工品として付加価値を付け、地元のイベントや離島フェアにて展示即売会を行った。

村外での販売として30年度も離島フェアで展示即売会を行い、年々知名度が上がってきており2日目の午前中で完売するほど大盛況だった。



体験漁業：後継者育成の一環として、リーフ内における追い込み漁を島の小学校5年生から中学3年生までを中心に毎年行っているが、30年度はシーズン時期に台風が頻発して事業が行えなかった。